

第43回全国豊かな海づくり大会 ～おんせん県おおいた大会～

「つなぐバトン 豊かな海を 次世代へ」をテーマに
令和6年11月9日(土)、10日(日)に大分県で開催

1 開催の意義

昭和56年の記念すべき第1回大会以来、大分県では2度目となる全国豊かな海づくり大会が、令和6年11月9日(土)、10日(日)に天皇皇后両陛下の御臨席のもと大分市と別府市で開催されました。

本県は、豊予海峡を境として北は瀬戸内海、南は豊後水道に面し、九州本土最高峰の中岳を含むくじゅう連山や、温泉の源泉数・湧出量が日本一の「おんせん県」であるなど、豊かな自然環境に恵まれています。

瀬戸内海沿岸は、豊前海や別府湾、豊後灘など多様な漁場で構成され、小型底びき網や刺し網、船びき網などを主体として、エビ類、マダイ、サワラ、シラスなどを水揚げしているほか、干潟域や内湾を利用したカキ養殖も盛んです。

一方、豊後水道では、まき網や定置網、一本釣りなどを主体として、アジやサバ、イワシなどを水揚げするとともに、静穏域が多い海岸地形を利用して、生産量全国1位のヒラメ、2位のブリをはじめとして、クロマグロ、シマアジなどの魚類養殖業や貝類養殖業も盛んに行われています。

また、内水面では、九州で漁獲量1位のアユをはじめとした河川漁業のほか、ドジョウやスッポンなどの養殖業も営まれています。

さらに、全国の高級ブランド魚の先駆けである「関あじ・関さば」をはじめ、「城下かわいい」、「姫島車えび」、「かぼすブリ」、「かぼすヒラメ」などの魅力あるブランド水産物が多く存在し、複雑な海岸線により地域ごとに多様な水産物が水揚げされています。

地域の特徴に根ざした多種多様な漁業は、四季折々の豊かな水産物を県内外に供給するとともに、水産加工品の原料や、観光資源としての利用

など、本県の産業振興に重要な役割を果たしています。

全国豊かな海づくり大会の第1回大会は、昭和56年に本県の鶴見町(現：佐伯市鶴見)で開催されました。大会を契機として、漁業関係者が一丸となり栽培漁業の推進や小型魚の漁獲規制、県下一斉休漁日の設定、環境に配慮した養殖業の振興などの取組が行われ、現在まで発展的に受け継がれています。一方で、水産資源の減少に伴う担い手の減少や地球温暖化による海洋環境の変化、消費者の魚離れなど水産業を取り巻く環境は一層厳しさを増しています。

こうした中、再び本県で大会を開催することは、水産業についての理解と関心をより一層深め、つくり育てる漁業を更に推進していく絶好の契機となりました。

また、環境保全の重要性を訴えかけるとともに、消費拡大に向けて本県の多様な水産物の味力(みりょく)や「おんせん県おおいた」の新たな魅力を県内外に広く発信する機会となりました。



大会公式ポスター

<大会基本理念>

大分県の豊かな海や川を次代へ引き継いでいくため、つくり育てる漁業に一層取り組むとともに、それらを育む自然環境を守っていくことの重要性を県内外に広く訴えかけます。また、四季折々の味味あふれる多様な水産物に加え、「おんせん県おおいた」の新たな魅力を全国へ広く発信していきます。

<大会基本方針>

- ①水産資源の保護と管理の一層の推進
- ②森から川、海へとつながる豊かな自然環境の保全
- ③四季折々の多様な水産物の消費拡大
- ④おんせん県の新たな魅力を全国に発信

<主な行事の日程等>

- 式典行事
日時 令和6年11月10日(日)午前
会場 iichiko 総合文化センター iichiko グランシアタ(大分市)
- 海上歓迎・放流行事
日時 令和6年11月10日(日)午後
会場 別府港第4埠頭(別府市)
- 絵画・習字優秀作品御覧、御懇談
日時 令和6年11月9日(土)午後
会場 ホテル日航大分 オアシスタワー(大分市)
- 関連行事「豊かな海づくりフェスタ」
日時 令和6年11月9日(土)・10日(日)
会場 トヨタカローラ大分 祝祭の広場・大分駅北口駅前広場(大分市)
- 関連行事(サテライト会場)
日時 令和6年11月10日(日)
会場 松浦漁港(佐伯市)、小祝漁港(中津市)



2 おんせん県おおいた大会の特色

本大会の特色は、大会始まりの地で迎える2度目の開催であることです。そのため、大会では、

第1回大会の開催県として、未来に向けた決意を表し、再び全国の漁業関係者ととも豊かな海づくりの取組を推進し、豊かな海を次世代につないでいくことを誓う場となるよう、各行事の企画・運営を進めました。

大会テーマを「つなぐバトン 豊かな海を次世代へ」とし、式典行事では、本県のこれまで続けられてきた、つくり育てる漁業などの取組を一層推進するとともに、自然環境の保全や水産物の消費拡大などについて、漁業関係者だけではなく、県民とともに挑戦する「これからの豊かな海づくり」を進めていく決意を全国に向けて発信しました。

また、海上歓迎・放流行事では、漁船による力強いパレードで全国からの招待者を歓迎するとともに、次世代を担う小学生の放流合図のもと、第1回大会の開催地である佐伯市松浦漁港の会場と相互に中継を行い、豊かな海を次世代に引き継いでいく想いを込めて、両会場で同時に稚魚の放流を行いました。

3 式典行事

天皇皇后両陛下の御臨席を賜り、全国各地から招待者など867名が参加し、式典行事を行いました。

(1) プロローグ

第1章 第1回大会から受け継がれる大分県をつくり育てる漁業

昭和56年に開催された第1回大会を振り返り、これまでに県内各地で進められたつくり育てる漁業や「関あじ・関さば」などの全国に先駆けた水産物のブランド化の取組を映像で紹介しました。

また、本県水産業の映像にあわせ、第1回大会にも出演した私立大分東明高等学校バントワリング部が演技をしました。

第2章 つくり育てる漁業の新たな挑戦

ナビゲーターのglobeのKEIKOさん、マーク・パンサーさんが登場し、本県の豊かな海を次世代につないでいくため、リニューアルされた大分県種苗生産施設を核とした拠点放流による資源造成や、マーケットや環境変化に対応した養殖業への転換に取り組む漁業者たちの新たな挑戦の姿を映像で紹介しました。

第3章 未来へバトンをつなぐために

ナビゲーターのマーク・パンサーさんが豊かな

海のバトンを未来へつなぐため、県民によって取り組まれている、ビーチクリーンなどの環境保全活動や高校生のアイデアによる藻場保全の取組、小学校での魚食普及活動取材し、その重要性を伝えました。

最後に、県立由布高等学校郷土芸能部による、海の神への感謝の念が込められた神楽「貴見城」が披露されました。



プロローグの様子

(2) 式典

iichiko グランシアタ・ジュニアオーケストラの演奏のもと、天皇皇后両陛下が御臨席されました。開会に先立ち、私立千代町幼稚園の先導で、県立海洋科学高等学校の旗手団が入場し、佐藤樹一郎大分県知事に大会旗が手渡されました。

続いて、中根隆文大分県漁業協同組合代表理事組合長の開会のことばで式典の幕が開き、額賀福志郎全国豊かな海づくり大会会長(前衆議院議長)及び佐藤大分県知事から主催者あいさつ、足立信也大分市長から歓迎のことばが述べられました。



大会旗入場

天皇陛下からは、「大会始まりの地で行われる今回の大会を契機として、全国各地において取り組まれてきた豊かな海づくりの活動に、皆さんの英知と努力を再び結集し、更に発展させていくことを期待します。そして、人々の海や水産業への関心と理解がより深まり、豊かな海づくりの輪が、

ここ大分の地から全国へ、そして未来に向けて大きく広がっていくことを願い、私の挨拶といたします。」とお言葉を頂きました(全文は別掲)。



天皇陛下のことば

功績団体表彰受賞者及び作品コンクール受賞者代表の表彰に続き、作文コンクールで大会会長賞を受賞した中園瑛斗さん(大分市立大道小学校2年)が作文「ぼくたちの海をまもろう」を発表しました(全文は別掲)。大舞台で緊張しながらも素晴らしい発表をしてくれた中園さんは「(作文を読んだ後)大きな拍手がもらえて、僕の気持ちが伝わったんだと思って嬉しかったです」と大会後に感想を話してくれました。



最優秀作文の発表

次に天皇皇后両陛下から漁業関係者へ、県立大分西高等学校の生徒の介添えにより、イサキ、キジハタ、カジメ、アサリの4種の稚魚等をお手渡しいただきました。お手渡しの容器は、本県の伝統的工芸品である「別府竹細工」を用いて、別府竹製品協同組合に制作していただきました。別府竹細工には、200種類以上の編み方があり、容器の底部には、編み目が美しく、軽量で丈夫な「六ツ目編み」の技法を用い、容器の蓋には、隙間なく竹を編み込み、精巧で頑丈な「六ツ目抜き」の技法が用いられました。



稚魚等のお手渡し



お手渡し容器

海づくりメッセージでは、県内の漁業者と環境保全活動者4組5名が登壇し、それぞれ、①豊かな海と漁師の誇り、②未来にわたって続くブリ養殖、③豊かな自然を未来に、④魚を楽しむ食卓と題し、自らの活動をもとにした豊かな海を次世代に引き継いでいく決意を力強く宣言しました。



海づくりメッセージ

続いて、坂本雅信豊かな海づくり大会推進委員会会長（全国漁業協同組合連合会代表理事会長）による大会決議（全文は別掲）が満場の拍手で採択された後、大会旗が佐藤大分県知事から次期開催県の一見勝之三重県知事に引き継がれ、嶋幸一大分県議会議長の閉会のことばで式典の幕を閉じました。

(3) エピローグ

式典終了後、尾野賢治大分県副知事から功績団体表彰受賞者と作品コンクール受賞者へ表彰状の授与が行われました。

エンディングでは、全国の招待者に向けたエールの気持ちを込めた歌と踊りを披露しました。関の鯛つり唄・踊り保存会、大分市立佐賀関中学校、貴美千佳の会の皆さんが「関の鯛つり唄」を、津久見樫の実少年少女合唱団が「瑠璃色の地球」を合唱しました。



エピローグの様子

4 海上歓迎・放流行事

式典行事に引き続き、別府港第4埠頭において、天皇皇后両陛下の御臨席を賜り、県内外の招待者や地元の小学生など324名が参加し、海上歓迎・放流行事を行いました。

(1) 海上歓迎行事

当日は雨天で、あいにくの天気となりましたが、県立別府翔青高等学校の吹奏楽演奏により海上歓迎・放流行事が開会しました。豊後潮太鼓による勇壮な太鼓演奏のもと、漁船団パレードとして、会場である別府湾周辺で操業している大分県漁業協同組合の安岐、杵築、日出、別府、大分の各支店に所属する41隻の漁船が招待者の皆さまを歓迎するため、会場の沖合をパレードしました。



海上歓迎行事

また、漁法紹介パレードでは、本県で操業する漁船8隻と漁業調査船、漁業取締船が参加し、本県の代表的な漁法等を紹介しました。



漁法紹介

(2) 放流行事

本大会では、開催地である別府市の別府港第4埠頭のほか、第1回大会の開催地である佐伯市松浦漁港でも放流行事を行いました。放流行事では、県立海洋科学高等学校生の介添えにより、天皇皇后両陛下がマコガレイとマダイの稚魚を御放流されました。別府、佐伯の両会場を相互に映像中継し、両会場で同時に放流を行いました。第1回御放流では別府市立春木川小学校の児童、第2回御放流では佐伯市立松浦小学校の児童がそれぞれ海づくりのメッセージを添えて放流合図を行いました。



御放流



佐伯会場での放流の様子



小学生による放流合図（別府市立春木川小学校）

5 会場内でのおもてなし

式典行事、海上歓迎・放流行事それぞれの招待者の皆さんには、昼食として、本県を代表するイタリアンシェフ梯哲哉氏が監修した、県内の特産品をふんだんに盛り込み、イタリアンと郷土料理を基調とした大会記念弁当「おんせん県おおいた味力満載弁当」をご賞味いただきました。また、両行事会場のおもてなしコーナーでは、大分銘菓、ドリンクの配布や大分の海や水産業を紹介するパネル展示等を行い、招待者の皆さんをおもてなししました。



大会記念弁当「おんせん県おおいた味力満載弁当」

6 絵画・習字優秀作品御覧、御懇談

11月9日（土）、大会行事の一環として実施した、作品コンクール（絵画・習字）の優秀作品（大分県知事賞受賞作品）を天皇皇后両陛下に御覧いただき、受賞者の児童・生徒一人一人にお声をかけていただきました。なお作文を含めた作品コンクール全体の応募総数は約9千点となり、県内の多くの児童・生徒がこのコンクールに参加しました。

その後、両陛下は、稚魚等のお受け者や海づくりメッセージ発表者の県内漁業関係者、功績団体表彰受賞者と御懇談されました。参加者からは、「緊張しましたが、両陛下から海のことに関して心配し、質問してくださりうれしかった」、「優しく話しかけていただき、話が弾み楽しかった」と感想があり、終始和やかな御懇談となりました。



作品御覧



漁業関係者との御懇談

7 関連行事

(1) 豊かな海づくりフェスタ

11月9日（土）、10日（日）に、豊かなおおいたの海の幸を食べて、体験して、楽しみながら学べるイベントとして、大分市で「豊かな海づくりフェスタ」を開催しました。さかなクン等によるステージイベントのほか、県内の沿岸市町村から水産グルメを扱うブースが多数出展し、多様な



フェスタ全景

本県水産物の味力を発信しました。また、魚のつかみ取りや生物展示、海藻や貝殻などを使った工作や海ごみ探しワークショップなど、企画展示・体験ブースを展開し、豊かな海とその保全について、楽しく学んでいただきました。

会場には2日間で延べ約3万6千人の来場があり、大いににぎわいました。



海藻おしば教室

(2) サテライト会場

11月10日（日）に、大会に合わせ、佐伯市の松浦漁港で「東九州大漁祭・つるみ豊魚祭」、中津市の小祝漁港で「市民おさかな感謝デー」が開催されました。地元の水産物の販売やステージイ



松浦漁港「東九州大漁祭・つるみ豊魚祭」



小祝漁港「市民おさかな感謝デー」

ベントなどのほか、式典行事と海上歓迎・放流行事の様子を生中継し、県内全体で一体感のある演出を行いました。

8 お手渡し魚等の記念放流

式典行事で天皇皇后両陛下からお手渡しされた稚魚等は、お手渡しを受けた漁業関係者等により、県内の各海域で放流等が行われました。

イサキは県南海域の大島地先（佐伯市）、キジ

ハタは東国東海域の姫島地先（姫島村）、カジメは北海道海域の津久見及び保戸島地先（津久見市）、アサリは豊前海海域の中津地先（中津市）に放流や移植が行われました。

9 謝辞

本大会の開催にあたり、多くの団体や関係者の皆さまにご支援、ご協力をいただきました。この場をお借りして厚く御礼申し上げます。



姫島地先でのキジハタの記念放流



天皇陛下のおことば

第43回全国豊かな海づくり大会が、ここ大分県で開催され、皆さんと共に出席できることをうれしく思います。

本大会は43年前、ここ大分県から始まりました。第1回大会は、「そだてよう 豊かな海を ふるさとを」をテーマに、現在の佐伯市にある松浦漁港で開催され、これを契機として、これまで全国の多くの関係者により、漁業振興や自然環境の保全活動が積極的に行われてきました。

ここ大分でも、資源管理と一体となった栽培漁業や、ブリやヒラメなどを始めとした魚類や貝類の養殖業の振興のほか、ブランド化に早くから取り組み、全国でも有数の水産物の生産地となっています。こうした取組を、長年にわたり続けてこられた皆さんの努力に深く敬意を表します。

現在、大分県では、この豊かな海を次の世代に引き継いでいくため、最新の生産施設を導入し、漁場環境の整備と稚魚の育成に適した場所への集中放流を一体的に行うことで、より効果的な栽培漁業に取り組んでいると聞いています。また、養殖業では市場環境の変化に対応できる持続的な産地づくりを目指しているほか、水産物の消費拡大や、豊かな自然環境の保全活動など、県民の皆さんによる様々な取組が行われていると聞いています。

地球温暖化や海洋プラスチックごみの問題など、国際的な課題も生じている中で、漁業関係者の皆さんの御苦労も多いことと思います。

「つなぐバトン 豊かな海を 次世代へ」をテーマに、大会始まりの地で行われる今回の大会を契機として、全国各地において取り組まれてきた豊かな海づくりの活動に、皆さんの英知と努力を再び結集し、更に発展させていくことを期待します。そして、人々の海や水産業への関心と理解がより深まり、豊かな海づくりの輪が、ここ大分の地から全国へ、そして未来に向けて大きく広がっていくことを願い、私の挨拶といたします。

大会決議

四方を海に囲まれた日本は、古より津々浦々からもたらされる海の幸を享受し、世界に誇る魚食文化を築いてきた。

ここ大分県は、北は瀬戸内海、南は豊後水道に面し、広大な干潟やリアス海岸からなる豊かな漁場で育まれた多種多様な魚介類を生産するとともに、全国に先駆けてブランド魚を展開するなど、地域の特性を活かして水産業を発展させてきた。

私たち水産関係者は、近年の急激な海洋環境の変化に対応しつつ、資源管理や藻場・干潟の

保全等環境回復の取組を通じて、水産食料の安定供給の役割を果たす責務がある。

本年は、全国豊かな海づくり大会発祥の地であるここ大分県において、「つなぐパトン 豊かな海を 次世代へ」を合言葉に、つくり育てる漁業に一層取り組むとともに、森・川・海のつながりの重要性を再認識し、決意を新たに豊穡の海を次世代に引き継いでいくことを、ここに決議する。

令和6年11月10日

第43回全国豊かな海づくり大会

作文「ぼくたちの海をまもろう」



ぼくは、海の生きものの本や図かんを読むことが大好きです。その本の中で、ぜつめつしそうな生きものがたくさんいることを知って、とてもかなしくなりました。さらにその原因が、人間が海の生きものをつかまえすぎ、海をよごしていることが間だいたと知って、このままでは海から魚がいなくなってしまうのではないかとこわくなり、海をいじめる人間をゆるせないと思えるようになりました。

夏休みにセーリング体けんて海へ行った時のことです。さい後にみんなでゴミひろいをしたのですが、プラスチックなどのゴミがあまりおちていませんでした。でも、それは海をきれいにしてくれている人がいるからだとしてセーリングの先生に教わりました。自分たちが気もちよくつかうためだけではなく、海や魚をまもるためでもあるのだと気づきました。

また、ある日テレビでSDGsのアニメをやっていて、「十四番、海のゆたかさをまもろう！」と言っていました。ぼくはその言ばは、魚たちが自由に生きられる世界をつくろうといういみだと考え、自分に何ができるかもっとしらべてやってみたくなりました。今、家ぞくとすでにやっていることをしようかします。

まず、プラスチックゴミを出さないために、あまりペットボトルは買わず、お出かけするときは、かならず水とうをもっていきます。ペットボトルを買ったときは、すてる前に自分のおもちゃを作るざいりょうとして使い、さい後にきちんと分べつしてすてています。

つぎに、ビニールぶくろやスプーンも買わず、マイバッグを使うようにしています。外でごはんを食べる時は、自分のはしやフォークを家からもって行きます。学校でもわりばしを使わなくてすむように、おはしをわすれず、使ったビニールぶくろはゴミぶくろとしてもう一ど使います。どんなものでも大切に使うことが海をまもることにつながると思います。

海の生きものは一どぜつめつしてしまうと、もう二どともどってくることはありません。ぼくたちはぜつめつしそうな魚たちをまもることができるはずで

す。ぼくはセーリング体けんや本、テレビでべん強したことを実さいのくらしの中でも活かして、海にやさしいことをこれからも見つけていきたいと思

います。そして、ぼくは魚を食べることが大好きなので、おいしい魚をとってくれる人たちにかんしゃしたいです。ここに書いた気もちをわすれないように、これからも海の本を読み続けます。

ぜつめつしそうな魚たちを、ぼくたちの手でまもりましょ

う。 なかぞの えいと
大分市立大道小学校2年 中園 瑛斗